

保 育 の 實 際

民主的性格の方向づけ (三)

倉 橋 惣 三

三 責任感の芽

民主的性格の最も大切な點は、誰れもが責任をもつといふことである。民主的生活の特質として、自由と平等とが叫ばれるが、それは民主的生活の一つの結果であり、結果としての要求であり、或る言ひ方を以てすれば、民主的生活の完成によつて、各人が享受せられる明朗な生活、幸福な生活の姿であるともいへる。勿論、自由平等を切愛し、熱求するころが、各人の性格の中にしつかりなければならぬのであるが、これも、或る言ひ方によれば、自由平等の充分享受せられる生活の中へ自他の中へ自他を置きたいといふことであるといつていい。殊に、自由平等を切愛し熱求するからといって、自分だけがそれを要求するのではない。假りに自分だけが自由を得、平等に扱はれたといつても、他も自由と平等とを與へられてゐるのでなければ、その切愛も熱求も満足されるものでなく、また、眞に自由平等への切愛だといへない。

且、自分だけの平等なんといふことは、平等といふことの意味においてもあり得ないことである。すなはち、自分だけ自由平等にならうとしても、それで直ぐ民主的生活を必ず正しく生み出し得ると限らない。各人のその心が集つて、民主的社會をつくり上げるであらうことは勿論であるが、元來、自由の要求は、不自由からの自由、平等の要求は、不平等からの平等に發することの多いもので、その點に、他への要求といふ性質をもつてゐる。自由を與へよ、平等を與へよといふ言葉は、その點をはつきり出してゐるものである。ほんたうにその人の性格からの反省としては、他人の自由と平等とに對して自分自身が反省せられる譯であるが、それよりも自分の自由を妨げるものとして、他人を責めることの方が常であり易い。少くとも、自分ひとりを反省しても仕方がないといつた風のところをもち易い。

これに對して、責任といふことは、自由平等を眞につくるに缺くことの出来ない自分そのものゝ在り方である。銘々責任を感じない各人の集りの間に、眞の自由平等が存しようはない。自分を自分として責任をもつものゝ間にのみ、自由と平等が成立し、又自由平等の生活をうくることに互が責任を感ずるのでもなくてはならない。

且また、責任は民主的生活の眞に正しく行はれてゐる時のみ、眞に正しく、存立されるものであり、その意味では眞の責任生活は民主的生活の所産であるといへるのである。

るが、責任感そのものは、民主的生活の成果ではなくどこまでも、個々銘々の自分としての反省である。民主的生活でないから、正しく責任をとり難いといふこともあるが、その時でも、責任を感じるゝと否とは自分の性格のあり方である。更にそれ以上、自分ひとりて自分を反省することである。責任を感じるゝといふことは、責任を盡したいといふ活動であると共に、責任を果さなかつた時自ら苦しみ、悲しみ、少なくとも不快とする心もちである。

この責任心こそ、民主的性格のものである。民主主義では個の尊重を第一とすることは常にいはれるところであるが、個が眞に個として存在するのは、それが、自分の在り方存り場における責任を守るからである。個が主體となるといふのも、個が責任主體となるの意味に他ならない。無責任では個の社會的存在とはならない。

民主的生活では、素より責任を他に要求する。無責任を許さない。しかし、自ら責任を感じるゝことなくして、他にのみ責任をもとめることは、勝手の我まゝであるといふ以上に、責任を責任として求めてゐることではさへない。他へのおしつけ、よりかゝりに過ぎない。他を自分の便宜のために要求するだけで、その人の責任、その人としての責任を問題にしてゐるのではない。つまり、責任感とは人自らの生活である。人自らの生活は純一に性格から發する。民主的性格の最も大切な點は責任感をもつことだと前に言つたのは此の意味である。

さて、責任感といふと、乳兒の生活に對して餘りに大きな響に聞える。實際、幼兒にさうした意識もなく、そんな言葉はない。従つて、それをおとなと同じやうな生活感情として指導し、教訓してゆくことは出來ない。そこで、幼兒生活において、それはどういふ形で存在し、又方向づけられるかといふことになる。

(イ) 自分の身のまはりのことで出來ることは自分ですること。

これは、獨立心の訓練といふ名でいはれてゐることであるが、獨立心つまり自己への責任である。自分のことは自分でしないといふ心は、自分で出來ることをしないで、人にさせるといふことで、それだけ自分の責任をつくさないことである。この點で、幼兒にむつかしいことは勿論出來ないが、幼兒は實は、自分で出來る出來ないに拘はらず自分でしたい心をもつてゐる。それを樂しんでもゐる。さうしてまがりなりにもそれが出來た時、大に喜ぶものである。ところで、その喜びを、出來た喜び、つまり能力の喜びと解することが常であるが、實は、もつと深く、自己の責任の喜びなのである。従つて、「よく出來ましたねえ」といふよりは、「よくしましたねえ」と言つてやるのが正しいのである。

(ロ) 自分のきまつた場所、持ちものを、いい加減に間違へぬこと。

これは、良習慣とか規律とかの訓練といはれてゐるものであるが、つまりは、自分を守ること、大切な責任である。

おとなでいへば、仕事の自分の持ち場、受もちを守ることに對する。席をきめるのも所有品、使用品を一定するのも、銘々筆筒や引出しをきめて仕舞はせるのも、ものにおいてその責任の所在を感じさせるのである。人のものは我がものといつた亂雑は、我がもの、即ち自分を投げやりにする放漫、即ち自分への無責任である。

(ハ) 約束を守ること。これは、もとより餘り厳しくはいへない。約束といふことそのことが、幼児生活において、さうしつかり出来るものでないからである。しかし、小さいこと、やさしいことで、約束の稽古をさせることは必要である。よく規則を守らせるといふか、規則などいふ一般的なことで、客觀的な方則などは、幼児にはよく分らない。それよりも、具體的に、幼児のひとり／＼のお約束といふ形では、それを破らないこと、即ち自分の約束したことに無責任でないことの稽古は出来るであらう。勿論、去年の古證文を、忘れた頃にもち出したりすることは出来ない。

(ホ) 何かの御用をすること。

これも勤勞の訓練などして行はれるが、さうまでやかましいことではなく、これを片づけませう。こゝをきれいにしませう。このお手傳をして下さい。といつたことは、自分の身のまはりのことをするのは又少し異つた意味で、自分を自分として生活する一種である。それをして喜ぶのは、先生の命に従つたといふだけでなく、自分の分をしたといふ、自分への責任の喜びである。

自發といふことは、幼児教育の重要原理とされてゐる。それは勿論大切なことである。他動ではいけない。他律もいけない。しかし、自發はもと／＼生活々動の出發についてのことである。その生活には、終りがなくてはならない。終りのない生活は、しめくよりのない出まかせである。自發といふことの眞意は、出まかせでは決してないが、悪くするとさうなるものである。おとなでも、氣まぐれ自發で、しり切れとんぼといふ人が屢々ある。それでも差支へない、どこへも責任(迷惑)をかけないこともあるが、それでは自分への責任(成し遂げ)といふことはない。

そこで、自發的と共に目的々といふことが必要にもなる。初めから無計畫では、どこに責任のく／＼もない。計畫は初めの目的である。目的をきめ計畫を立て／＼も、その通り成し遂げることは、必ずしも常ではない。又、幼児にはまだ、目的とか計畫とか、そろ／＼きまつたことも強くは要求出来ない。しかし、一應のめあてはあり得るのである。これを目的保育といふ名で、私は以前から呼んでゐる。

目的保育といふとむつかし氣でもあるが、幼児が遊んでゐる時をよく見ると、目的をもつて活動してゐることが多い。雲のやうに風のやうに漂々としてゐることもあるが、きちんとねらいをつけてゐることも多い。石けり、玉なげ、皆然りである。駆けゆくにも、たゞなんとなく馳け出すこと——駆けるといふ動作活動だけを樂しむこともあるが、多くは目的に向つて馳ける。鬼ごっこだつてさうである。風のまに／＼馳

けてゐる譯ではない。木の實を取らうとする時、とんぼをつかまへようとする時、そのめあてはいふまでもなく、しつかりある。その目的活動は、目的を達した時うれしい、目的を達しない時、がっかりする。失望する。悲しむ。それは相手のつかまへられないこと、とんぼの逃げたことの悲しみでもあるが、實は、實に、自己の目的の遂げられなかつたことの悲しみである。その悲しみは、相手がわざとつかまへさせて呉れても、とんぼを代つて捕へて呉れても、決して解消する筈のものではない。結果のよしあしでなくて自分への責任が済まぬからである。

かうした責任感は、そうく、ぎゆうくと責めつけてはならない。それでは幼児に可愛さうである。しかしまた、可愛さうで、少しも責任の満足は味ははせないのは、一層可愛さうなことになる。民主的性情の方向に副はない。

尙ほ、責任感といつても、片くるしい義務の道徳として訓へるのではなく、たゞ、さうした心もち、さうしなければ氣がすまぬといつた心もちを、生活の中に養つてゆくのであるから、訓練といふよりも、生活習慣にほかならない。そこで、生活習慣をつける一般の原則通り、それが出来易いやうな環境が必要である。(イ)の、身のまはりのことを自分でさせるにしても、それが幼児として出来易いやうにされてゐなければならぬ。靴の紐も結びよく、上衣のボタンもはめ易く、帽子は掛け易く、工夫されてゐなくてはならない。手数のか

ゝる細い紐や、おとなでもむづかしい堅いボタンのつけ方や、背が屈きにくかつたり落ち易い帽子掛などで、それを要求するのは無理である。すべて無理では習慣をつけにくい。(ロ)の持ちものにしても、自分のものといふことが分り易く

してなければならぬ。自分の場所といふことは、同じ椅子でも、位置の感覚といつたことで比較的孩子もは習慣づけられ易いが、持ち物のまぎれ易いのは無理である。幼稚園では同じ形の揃ひのものを使はせる風が多いが、その區別の容易につくやうに工夫しておいてやらなくてははいけない。(ハ)の約束を守らせる場合でも、實行にむづかしいことは無理だ。

殊に去年の約束などは全く無理だ。少くも、一貫の生活内容として、時々新しく約束されてゆく必要がある。殊に、新しくといふよりも、段々に約束が、積み重ねられてゆく(同じ約束が)時、段々實行し易くなる。

かう考へてゆく時、一番大切な環境條件が、先生の約束方針の一貫であることは、いふまでもない。と同じく、先生自身の責任感(以上の意味における)が、大切であることは實際的に更に大切である。先生自身、ゆきあたりばつたり、やりつばなしの、自己無責任な生活をして、幼児にそれをしつけることは到底出来得ないであらう。きまり、きちようめんな先生のみが、幼児を、その生活習慣に導く。わたし達が、なるほど、此の組の幼児が、こんなだといふことを、先生においてうなづかされるのは常であるが、今こゝで言つてゐる方面においては、それが最もはつきりする。